

# 緑の地球 GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

- 「何かやりたいやつ」の黄土高原 ... P 2  
●世界の森林と日本の森林 (その1) ... P 4  
●GENのなかのチコロナイの活動 ..... P 6



黄土高原で春耕がはじまった。耕され、舞い上がった黄砂は、日本上空まで飛んでくる (撮影：橋本紘二)

GENに参加するには

- ☆会員・会報購読者になる
- ☆自然と親しむ会・講演会・報告会・学習会に参加する
- ☆ワーキングツアーに参加する
- ☆ビデオ『黄土高原に緑を!』を見る
- ☆使用済みテレカ・オレカを集めて送る

etc. あなたのご参加を待っています!

1996・5

46

# 「何かやりたいやつ」たちの 黄土高原・体験記

昨年春からの準備期間を経て、いよいよ今年から、全ジャスコ労働組合の黄土高原における緑化協力が本格的にはじまりました。テレカあつめなどは昨年からご協力いただいていたのですが、やっぱり黄土高原を見てもらわなくては！ 第1回全ジャスコ労働組合黄土高原ワーキングツアーは、4月8日から13日のスケジュールで実施されました。最初の宿舎では、「こんなところにあと4日も泊まるの？ いやだ、日本に帰りたい！ 盲腸にでもなったら帰れるかもしれない」と思った人もいたそうですが、最後には「次回のツアーが無理なら5年後でも、植えた木がどうなってるか絶対見にくる！」気持ちになっていたとか。団長の高橋さんに感想を寄せていただきました。ツアー中参加者がつけた日誌の記録とあわせてごらんください。

## 素直な気持ちで取り組みました

～今後も末永い活動を～

全ジャスコ労働組合 高橋 省吾



陽高県守口堡村で。村中総出で大歓迎をうけた

以前から労働組合の活動としてさまざまなボランティア活動に取り組んできましたが、本年より緑の地球ネットワークの緑化ツアーに参加する形で、ワーキングツアーへの取り組みをスタートしました。個人負担5万円で参加者を募り、論文を書かせてそれを審査して選出した29名で成田を出発しました。6日間のツアーで大同県、陽高県、渾源県をまわり、3か所でモンゴルマツ、アンズの苗を植樹してきました。

今回のツアーは天候に恵まれました。出発前に降った雪と最終日に降った雨のおかげで、つたないわれわれの技術でも高い活着率が望めそうです。陽高県守口堡村では継続的に果樹園を植樹し、全ジャスコ労働組合の黄土高原での活動の拠点としていきますが、特にここのアンズが育っていくことは、団員一同たいへん楽しみにしております。

今回のツアーはなにぶん初めての取り組みであり、またGENでもあまり経験のない人数規模でもありましたので、とにかく全員無事に帰ってくるということを第一の目標としておりました。途中一人パスポートを紛失するというトラブルもありましたが、緑色地球ネットワークの方の機転でことなきを得ました。他

には大きく体調をくずす者もなく無事に帰ってくる事ができ、事務局としてはホッとしております。

ツアーの趣旨目的としては特に明確にせず、「何かやってみたいやつはいないか」という呼びかけに対して、中

国に行ってみたい、何か変わったことをやってみたいという人たちが参加しました。参加者にどこまでGENの活動・労働組合の活動が理解されるかはやや不安でした。しかし、自らの手で苗を植え、村の人たちとのふれあいを繰り返すことによって、黄土高原への愛着がわき、この地での緑の重要性も（高見さんの説明によって）肌で感じとれたようでした。事前に「なぜこの活動をするのか」というような教育をしなかったことでかえって素直な気持ちで取り組めたようです。

今回の参加者は、通常の労組のイベントへの参加者とは異なり、金を出しても論文を書いても行きたいという積極的な人に行ってもらったということが、参加者の満足度を高めることになったようです。今後もあせることなく、少ない人数でも行きたい人に行ってもらおうという地道な活動で末永い活動にしていきたいと考えております。

## お客さんではなく いつか仲間として…

～全ジャスコワーキングツアー日誌から

9時30分、陳庄村にて植樹。現地の方々が畝を作り、水が流れていかないように準備してくださるところに1m間隔にスコップで穴を掘り、小さな苗を1本ずつ植えていく。根が真っすぐに、曲がらないように注意して植えた。どうか、元気にたくましく育ってほしいと祈りながら植えた。村の人たちといっしょに、言葉は通じないが、

笑顔と笑顔で心が通じる楽しい作業であった。（4.9 塩見 明子）

最初は心を込めて「大きくなるんだよ!!」と丸大ハムのCMみたいな心でやさしく植えていたのに、最後の方になると「これだけ苦しみながらやっとなんじゃー、木になる前に、かれやがったら絶対ゆるさん!!」とまったく自分本位なる怒りパワーにたよるようにな



なれないスコップをあやつり、無心に木を植える

と、すごく感動的だった。

植樹の方は、昨日の比較的楽な作業が頭にあっただので、今日は、少しづらかった。量が多いし、スコップは重いし、でも子どもたちがけなげに苗を持っているのを見るとほっとけないし...。(中略) また、バスにゆられ、次の学校へ。ここでは

っていた。やっぱり自分はバカである。しかし、フツと自分をふり返ると、いつのまにか無心になって働いている自分に気が付く。周りを見るとみんな、一生懸命になっている。しんけんまなざしから中国も日本もいっさい関係ない、人間の笑顔が地面にポトリ...。木は生物であるから、そんな形で植えられた苗木は、日立のCMみたいに大きく育ってゆくと思う。(中略) 帰り、バスにのる前に、もってきたガム60枚とチョコレート等を子どもたちに配った。本当に純粋な気持ちだけで、この子どもたちをよるこぼしたくて配っただけで、あとで考えると、いろいろと悩む。軽い気持ちで、日本の菓子を配ったが、生活水準以上の喜びや、ものを与えると、それはかえって親をこまらしたり、不幸になったりすることにつながらないか？ 物物的に豊かなことを見せびらかしていることにはならないのか？ 日本人が来るとものがもらえるという先入観がうまれて、のちの活動に支障が出ることはないのか？ いまもいろいろと考えている。(4.10 竹本和佳)

朝からいきなり植樹ということで、体力がなくなりかけていた私は、少し気が重い1日のスタートをきった。バスにゆられて、気がつくのと、とてもカラフルな色が目の前にあらわれてピククリ！ 守口堡村の子どもたち、大人も総出で私たちを歓迎してくれたのだ。あんな小さな村に外国人がやってくるなんて、お祭り以上のイベントなんだろう。子どもの音楽が、きっと何日前から練習したんだろうな、と思う

緑の地球ネットワークから、机といす100コ寄贈されるとのことで、記念式典があった。ここでも、熱烈的な歓迎ぶりであつた。昨年9月に水害があり、甚大な被害をこうむったそうで、校舎もくずれていた。1年前の神戸のようすとだぶり、複雑な心境だった。あの机といすを有効に活用して、しっかり勉強してね、という気持ちを、学校にふりまきながら、学校をあとにする。(4.10 間処 陽子)

今日は、渾源県宝峰寨に植林だ。スコップを持ち、いきおいよく気合いをいれ、息切れするほど穴を掘る。ずーと奥まで掘り進んだところで、スコップが“ガチッ”と鳴り、手がジーンとしびれた。石だ!! 石、石、石、もうなかなか掘り進めない。これが高見先生が土壌が硬く、石でスコップがたたないと言っていたやつだ。ほんとに石しかでてこない(土よりも多い)。(中略) 昼食は昨日同様民家で食事。“ほんとうにおいしい”、ごちそうだ。(中略) 昨年は天災で作物が不作できびしいなか、このごちそうは何とも言いがたいほどありがたかった。でも、“おいしい、おいしい”と食べる私たちに主人の孟さんがぼつり“みなさんのお口に合わないでしょうね”と言ったときは、お客さんとしてではなく、無理かもしれないがいつか仲間として、気軽にご飯が食べられる日がきたらいいなと思ってしまった。(4.11 黒澤 邦仁)

雪はすすむにつれて雨になっていく。めぐみの雨だと、高見さんはしきりにいうけど、そんなに雪と雨にこれほどまでに感謝されるとは...。実家の高松も、水不足で時間が決まっていた時期があり、雨を喜んでいて友人がいたな...。初日に植えた松もあんずも、根がきつとつくことと思います。

左手には畑がずっとずっとつづいている。雨のなか、農作業をする人たち。わずかな道具で、文明は人に何をあたえたかを考えさせられる。(4.12 古賀 浩子)

最後に、私がこの6日間で一番考えさせられたことは「心の豊かさ」です。本当の心の豊かさとは何なのでしょう。われわれ先進国のように物質的な豊かさが、心の豊かさにつながるとは思えません。みなさんも思い出してください。あの大同市の農民たちの笑顔を...。彼らは決して裕福ではないし、子どもたちも全員が小学校に行けるわけではないという経済状態です。にもかかわらず、われわれを迎え入れてくれるあの盛大な演奏、あの気持ちのこもった家庭料理、そしてあの笑顔。

いま思い出しても涙があふれそうです。彼らこそが本当に生きる喜びを知っているのではないか、彼らこそが本当の「心の豊かさ」をもっているのではないかと思います。(4.13 田中 琢己)



作業の合間に子どもたちと。ちょっと緊張気味？

# 世界の森林と日本の森林（その1）

立花 吉茂（花園大学教授）

## はじめに

地球の緑が減ってピンチの状態になっている、という話はよく耳にするが、本当にそうなのだろうか？ いったいどれだけの森林が世界にあるのだろうか。そして、それがどのくらい減ってきたのだろうか？ 森林の量とともに森林の質はどうなっているのだろうか？ なぜ木を植えなければならないのだろうか？ などなど、ちょっとまじめに考えてみよう。

## 世界の森林の分布

「森林」は乾燥した土地には成立しない。だから雨が多くて暖かい地方に発達する。熱帯の多湿地方には熱帯雨林ができ、日本の南部のような暖かい温帯には常緑樹林ができ、すこし寒い地方には落葉樹林が、そして寒い地方には針葉樹林ができる。もっと寒くなると水分があっても高い木は育たずにツンドラになってしまう。

雨の少ない地方は暖かくても森林はできない。極端な場合には砂漠になってしまい、サバンナやステップと呼ばれる「草原」になる。草原は草だけの場合もあれば、低木が混じったり、低木だけの場合もある。寒くて乾燥した地方には当然ながら森林は成立しない。

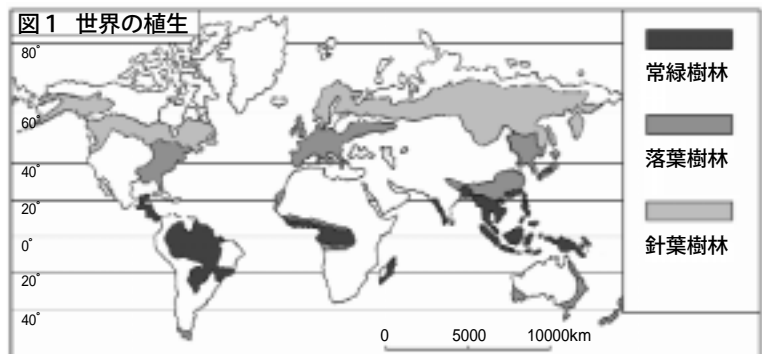
図1に世界の森林の分布図を示した。これを見ると、もともと世界に森林はそんなに多くないことがわかる。それはもともと、乾燥地が多いことを意味している。そんな少ない森林がどんどん切り倒されたり、焼き払われたりしているので、もう半分以上が失われた。**日本の森林**

日本は世界の先進国のなかで抜群に森林の多い国である。国が小さいから面積は少ないが、どこを見ても山には木が茂っている。

そして、その種類数の多いことはとびぬけている。ヨーロッパ全土で100種あるか、ないかの程度なのに、この狭い日本には600種以上の高木が生えているのである。その原因は暖かくて

雨が多いことにある。梅雨があって夏雨型の気候だからであり、冬があるにもかかわらず、常緑樹林が発達しているのは黒潮の影響も見逃せない。日本は全国的に1000ミリ以上の雨があるから、関東以西（南）には照葉樹林が、その北方には落葉樹林が、そして北海道の北東部には針葉樹林が発達していた。

農耕を覚えたわれわれの祖先は、この森林を切り開いて、平坦部は農地に、その近くを里山として二次林を活用した。したがって、日本の自然林は大部分がなくなったのであるが、元の森林の種類は絶滅しなかった。それは20km四方に必ず存在する神社、仏閣に生き残っていたのである。この生き残りの種子が鳥たちに運ばれて、自然は復活するのである。だから日本の山には木を植えなくても緑がいっぱいあって、自然に復活して元の森林に戻ってゆく。しかし完全に復活するには300年以上かかる、と言われている。



## 1996 夏の黄土高原ワーキングツアーへのお誘い



黄土高原ワーキングツアーも回をおうごとに参加者がふえてきました。もっと作業がしたかったといわれることが多いのですが、農村にはいって農民と交流できる、GENのツアーならではの特長はみなさん満喫しておられるようです。今年の夏は、下記の要領で実施いたします。B班は、大同市南部の自然保護区で植物標本づくりを予定しています。

A班 7月25日（木）～8月1日（木）（途中までB班と同行）  
一般185,000円、学生175,000円

B班 7月25日（木）～8月4日（日）（途中までA班と同行）  
一般200,000円、学生190,000円

定員 A・B班あわせて30名

締切り 6月25日。ただし、定員に達し次第締め切ります。

問合せ・申込みはGEN事務所まで（TEL. 06-583-1719）

また、秋にも派遣を考えています。10月初旬を中心に、1週間程度の予定です。こちら、決まり次第ご案内いたします。



## 関東で交流会を開きます！

「なぜ緑の地球ネットワークは、わざわざ中国まで出かけて行って木を植えているのでしょうか。黄土高原ワーキングツアーの話をしたら、こんな質問を受けました。

昨年夏の猛暑に体調をくずされた方も、多くいたのではないのでしょうか。最近まとめられたデータによると、昨年は地球全体の平均気温が上昇していたとのこと。二酸化炭素の大気中への放出の結果、地球の温暖化が着実に進行していると思われまます。しかも、アジアでは近年の経済成長とともに、二酸化炭素の放出量は急増してきました。この問題を解決する唯一の方法は、若い育ち盛りの森林を増やしていくことです。

地球規模の問題には、地球規模の視野をもって向き合わなければなりません。森林を増やす作業は、なにも日本国内に限定する必要はありません。中国に木を植えることは、地球というひとつのシステムを介して、私たちの将

来に結びついているのです。

「なぜ木を植えているのかは分かりました。しかし、どこから何をやらなければならないのですか」と質問が続いて出てきました。

地球の温暖化を、一朝一夕で解決することはできないと思います。おそらくこれから数世代を重ねるなかで、徐々に森を増やし、人類が放出する二酸化炭素の量と収支バランスを回復することが求められます。気の長い作業は、せっかちに動いては息切れします。まず、森の楽しさを再確認し、その楽しさを次の世代の子どもたちに伝えること、それが重要なのではないのでしょうか。

地球温暖化が心配な人、森林散策が好きな人、関東に在住するそういったみなさん、集まってみませんか。一人ひとりの「緑の原体験」を語り合い、森との楽しいつきあいはじめる人の輪をつくりたいと思います。会員でない方も、どうぞ。

### ★GEN関東ランチ（仮称）第1回交流会

日時：5月25日（土）15時から18時  
ころまで

場所：立教大学、池袋キャンパス、5号館1階、第1会議室

内容：GENの活動の紹介（黄土高原ワーキングツアーの体験など）

参加者の一人ひとりの「緑の原体験」を語り合ひましよう。

関東在住者の要望を集約し、今後の活動について話し合ひたいと思ひまます。

問合せ：上田信 TEL/FAX. 03-3838-1695

参加希望者は、前日までにご連絡ください。（上田信）



## 緑の中国 歴史篇 4

上田 信（立教大学助教授）

「南船北馬」という言葉は、中国の風土を表現するときにはしばしば使われます。中国の気候は、湿潤な南部の中国と乾燥した北部の中国に、はっきりと分かれています。わたしが最初に訪中した冬、北京で乾燥した空気は気管を傷つけるほど固いんだと知りました。ところが列車で南京へと向かう途中、淮河を越えるあたりから突然、空気がやさしくなるのを感じたのです。車窓には水路と麦を植えた水田が広がり、褐色の畑ばかりの華北の風景と、まったく異なっていました。南部は水路が多く、交通の手段も船が主となるのに対し、北部では乾燥した大地に行くには馬を使う、中国の概説書に書かれていることが、実感として理解できました。

わたしの体験は、地球の大気の動きと関係があります。地球の北半球では、赤道の近くに赤道西風と呼ばれる風が吹いています。この風の空気は、暖められた海から水分を補給され、その厚さは5000メートルほど。そのためにヒ



「南船北馬」－水の豊かな南部。川岸も「緑したたる」風景

マラヤ山脈を越えることができず、山にぶつかってわずかに上昇しただけで、大量の雨を降らすのです。赤道西風は、インドの西海岸のガーツ山脈の西斜面、ミャンマーのアラカン山脈の西斜面などで豪雨をもたらしつつ、東に進みます。ところが中国までくると遮る山地がなくなり、東中国海（東シナ海）に出るや北上をはじめます。湿っていても地面を這うように進むので、「湿舌」と呼ばれることもあるようです。リアルな表現で、最初にこの言葉を聞いたときには、ちょっとゾクッとしましたが、感覚的にはよく分かります。「湿舌」の北端が、実は日本にもそろそろやってくる、あの梅雨前線なのです。

しかし、「湿舌」もどこまでも北上し続けるわけにはいきません。チベット高原の東端で、北から吹き下ろしてくる乾燥した中緯度偏西風に行く手を阻まれるのです。

# 『緑の地球ネットワーク』のなかの『チコロナイ』の活動

チコロナイ部会世話人 武田 繁典

『緑の地球ネットワーク (GEN)』の中での『チコロナイ』の活動がどういう位置づけになっているのかとよく質問されます。会報『緑の地球』のバックナンバーをめくりながら、経過と現状を、私なりにまとめてみました。

## 1 経過

【1992年2月】

中国、ネパールでの緑化協力、国内での啓蒙、研究・学習活動を目的にGEN準備会発足。海外での緑化協力は全アジアの各地に広げていくことを目指す。(代表世話人佐野茂樹。)

【1992年12月】

GEN討論会で石原忠一さんの「北海道の森林破壊に対してアイヌ民族の人達と協力した活動を始めてはどうか」という提案があり、以前から関心を持っていた私が調査、現地との交流を開始。

【1993年4月】

GEN正式発足。第1回会員総会。中国の黄土高原、ネパールのムスタンでの緑化協力、国内での講演会や野外活動「自然と親しむ会」などの活動を継続。(代表世話人佐野茂樹。)

【1993年9月】

ナショナル・トラストによる森林保護を軸にした、北海道での緑化協力活動の開始を会報で呼びかけはじめる。

【1994年6月】

GEN講演会で、新井幹子さんの『わが父、貝澤正を語る』開催。

【1994年8月】

第1回二風谷ワーキングツアー実施。

【1994年12月】

ナショナル・トラスト運動『チコロナイ』第1期の募金活動開始。

【1995年2月】

GEN第2回会員総会。貝澤耕一さん来阪。総会でアピール。(代表立花吉茂。)

【1995年4月】

チコロナイ学習会(月1回)開始。

【1995年8月】

第2回二風谷ワーキングツアー実施。

【1995年10月】

秋の二風谷ツアー実施。

【1995年12月】

『チコロナイ』第1期の募金活動終了。約3.4ヘクタールの山林買い取り。約20ヘクタール山林の保全契約締結。『チコロナイ』第2期の募金活動開始。

【1996年1月】

GENとオーク200連絡協議会の主催で、萱野茂講演会を実施。

【1996年2月】

チコロナイアイヌ語講座(月1回)開始。

## 2 現状

【会員】

ナショナル・トラスト運動『チコロナイ』の募金活動に寄付された人316人の内、GENの会員になっている人は84人。これは会員総数420人の約20%にあたる。会報購読者は48人。

【役員】

世話人14人の内3人がチコロナイ部会を担当。

【会計】

1995年度(1995.4~1996.3)の収入・支出での協力事業費のうち、チコロナイ部会は約630万円、中国山西省は約

3,500万円。チコロナイ部会は全体の約15%にあたる。

第1期では、リーフレット印刷、通信・事務費などをすべてGENの費用で賄ったが、第2期より特に用途指定がない限り、募金活動に寄付された金額の5%をGEN全体の経常経費に入れて、通信・事務費などに使用。寄付者のうち、GEN会員や購読者になっていない人には、年に2回だけ会報を送る体制をとる。

## 3 会報

毎号8ページのうち、ほぼ2ページ分がチコロナイ部会に割り当てられている。原稿はチコロナイ担当の世話人が分担。

以上、思いつくままにまとめてみましたが、GEN全体のなかでチコロナイ部会をどう位置づけるか、問題点もあると思われます。例えば、ナショナル・トラストで取得した山林の所有・管理の問題、将来法人化をめざしていますが、そのときの在り方、対象場所や質、規模、発展段階などの異なるふたつ以上の活動をどう共存させていくかなどです。今後、どのようにしていけばよいか、ご意見を寄せていただきたいと思います。

## ナショナルトラスト『チコロナイ』現地研修

### 第3回二風谷ワーキングツアー

#### ご案内

一昨年、昨年に引き続いて、今年も8月に第3回二風谷ワーキングツアーを計画しています。希望者には詳しい予定をお知らせしますが、おおよそ次のとおりです。夏の計画の中に組み入れて参加してみませんか。

日時：8月16日～21日(現地集合、解散)

場所：二風谷、富良野

定員：20人(ただし、全行程に参加できる人)

費用：集合から解散まで5万円(予定)

内容：東大演習林、チコロナイの森、博物館見学、山・畑仕事、木彫り・刺繍体験、チブサンケ参加、交流等。

なお、予定変更の可能性もありますので、詳細は武田繁典(TEL/FAX. 06-704-7720)までお問い合わせください。

## 「チコロナイアイヌ語講座」～こんな感じでやってます

チコロナイアイヌ語講座・世話役兼講師 平石 清隆

関西初の常設アイヌ語講座が順調なスタートをきったので現状をご紹介します。

本講座では「チコロナイ」ゆかりの沙流地方のアイヌ語（萱野茂氏の母語）を学んでいます。毎回10名強の常連さんをむかえ、少人数ながら笑顔の絶えない雰囲気、しかもそれなりのレベルを保ちつつ楽しくやっています。そうそう、4月には早稲田大の田村ず子先生のお弟子さんが東京から飛び入りで参加されました。受講者のみなさんが非常に熱心なので、世話役の私も身のひきしまる、うれしくありがたい気持ちです。

いままでに内容的には、アイヌ語の文字（カナとローマ字）・発音・動詞の特徴等にふれつつ、簡単な作文を練習しました。また私が昨年アイヌの古老から直接聞かせていただいた民話

（ウエペケレ）のビデオ鑑賞を開始、文法や表現を学びつつあります。今後は会話練習もおこなう予定です。ぜひみなさんも一度気楽に顔を出してみてください。参加は「登録」というかたちをとり、教材費（半年2000円）をいただいておりますが、単発参加・ひやかしも可能です、お待ちしております！

トゥラノ  
いっしょに  
アイヌイタカニ  
アイヌ語で  
ウコイタカンロー！  
会話しましょう！

## 二風谷ダムを考える会

日時：6月14日（金）午後6時30分～8時30分

場所：大阪市立弁天町市民学習センター講堂（JR・地下鉄弁天町徒歩3分）

主催：「二風谷ダムを考える会」実行委員会

協力：貝澤耕一さん

後援：二風谷ダム裁判とつなぐ会（札幌）

連絡先：武田繁典

〒546 大阪市東住吉区今川6-2-6（TEL/FAX. 06-704-7720）

参加費：500円（資料代ふくむ）

なお、実行委員会に参加して下さる個人、賛助団体、個人として協力下さる方々を募集しています。連絡をお待ちしています。

また、上記に関連して、萱野茂、貝澤耕一、二風谷ダム裁判弁護団一同、二風谷ダム裁判とつなぐ会の署名協力の依頼が届きました。「二風谷ダム裁判とつなぐ会」は、会報27号（1994・6）でも紹介した札幌の市民団体です。

署名は、「二風谷ダムの建設・運用を取りやめ、『アイヌ民族を先住民族』とみとめることを求める要請書」というものです。ご協力下さる方は用紙を送りますので武田繁典までご連絡を。

GEN自然と親しむ会

## 武庫川と廃線跡の自然

新緑の色が日いちにちと濃くなってきます。緑の風に誘われて、自然と親しむ会は、箕面につづいて再度、石原忠一先生にご案内をお願いしました。ハイキングコースとしてもポピュラーな旧国鉄福知山線跡を生瀬から武田尾まで歩きませんか。

日時：6月2日（日）

集合：10時にJR生瀬駅

もちもの：弁当、水筒、懐中電灯

参加費：大人500円、中学生以下300円（保険料ふくむ）

小雨決行

歩きやすい靴でご参加ください。

定員：30人

申込み：5月28日までにGEN事務所まで。定員に達し次第締め切ります。

## ビデオ『黄土高原に緑を！』

もうごらんに

なりましたか？

『黄土高原に緑を！』

ビデオ作品・28分・カラー

定価5,000円（GEN会員価格3,500円）

郵送料390円別途

制作協力：環境庁・環境事業団地球環境基金

文部省選定／中華人民共和国駐日本国大使館推薦...など

申込み：GEN事務所まで（TEL. 06-583-1719 FAX. 06-583-1739）

## チコロナイ・アイヌ語講座

—いやでもわかるアイヌ語—  
第2回

日時：5月25日（土）14時～16時

資料代：1期（6回分）で2000円

問合せ：平石清隆（TEL. 0745-23-5627）

場所：GEN事務所（JR環状線・地下鉄中央線「弁天町」駅徒歩3分、TEL. 06-583-1719）

## チコロナイ学習会のご案内

日時：5月25日（土）16時～18時

場所：GEN事務所

テーマ：『チコロナイ学習会の方向性を探る!! 第2弾』

問い合わせ：円満堂（えんまんど）修治

TEL/FAX. 078-592-8466

参加費：100円

広く一般からの参加をお待ちしております。





森林文化シンポジウム  
**「木を伐り、使おう」**  
 - 環境保全の視点から

日本の山が危ない、といわれて久しくなります。家や家具は“安い”輸入材でつくり、コストのかかる国産材は採算があわないため、山は荒れ放題。林業の山や里山は、人の手を入れて、適量の木を伐ることが必要なのです。

山村に活気を、都市に木のあたたかさを取り戻すためにできることを考えましょう。

日時：6月15日（土）午後1時から（開場12時30分）  
 場所：日本生命研修所講堂（大阪市北区中之島4-3-43 TEL.06-443-3131）  
 主催：朝日新聞社、森林文化協会  
 協賛：サントリー、大和證券

参加費：無料  
 申込み：不要。受付けで「緑の地球」で見たと教えてください。  
 基調報告：  
 貝本 博幸（吉野青年林業会議所理事長）  
 三澤 康彦（Ms建築設計事務所）  
 村山日南子（お米の勉強会代表）  
 伊東 隆夫（京大木質化学研究所教授）  
 永田 健一（家具製作家）  
 問合せ：森林文化協会（TEL. 06-201-8410、8411）

**テレカ回収にご協力ありがとうございます！**

黄土高原の緑化に役立てようと、クラスみんなで使用済みテレカや募金を集めていた豊中市立豊島北小学校旧6年1組から、卒業を前に、たくさん集まりましたよ、と連絡をいただきました。贈呈式では、GEN世話人の前川宏さんが、写真パネルをつかって生徒や

先生、保護者に黄土高原の現状やGENの緑化協力について説明し、集まったテレカや募金を受け取りました。  
 また、学級だよりをあわせていただきましたので、その一部をここにご紹介します。  
**中国のみなさんへ**  
 こんにちは。私は先生の、黄土高原に緑を増やそう!! という、提案を聞いて、すぐにやってみたくて思いました。そして、責任者になって、やっているうちに、責任者になってよかったです。みんな、がんばって集め場なので、大切にしてください。お願いします。  
 旧6年1組のみんなは、雲南省の地震被害への募金もあつめたそうです。できる人が、できるときに、できることをする。簡単そうでなかなかできないボランティアの第1歩を、中学生になっても、さらに2歩目、3歩目につなげていってくださいね。それから、緑化協力金はもちろん、いただいた学級だよりの中国語版も中国にとどけますね。